金沢市日本中国友好協会における緑化活動への取り組み

金沢市日本中国友好協会

事務局長　元藤映了

当協会では、これまでに平成２１年度の四川省綿竹市における地震災害復旧緊急造林プロジェクト事業（４２ ha、９万９千本）を皮切りに、寧夏回族自治区で２ヶ所（１２２ ha、４４万１千本）、青海省で２ヶ所（１５５ ha、５２万７千本）の植樹をし、合計３１９ ha に１０６万７千本余の苗木を植えてきた（平成２７年度完了まで）。同時に毎年１０数名の植樹訪中団を派遣し、現地における実施状況の確認や事務手続きの打合せ、意見交換などを行ってきた。こういう活動を通じて友人もでき、毎年顔を合わせるのも楽しみのひとつとなっている。

最初に取り組んだ四川省は南の方の比較的温暖な気候で湿度も有り苗の活着にさほど神経を使う必要もなかったが、現在行っている寧夏回族自治区と青海省は中国の西北部で、標高が２千ｍ以上もあり寒冷で、降水量も極端に少なく土地も痩せている。このことから、苗の活着が一番気を使う点であり、風や砂嵐対策、施肥、灌水など困難なことも含め工夫しながら植樹活動に取り組んでいる。

そんな中、先輩格であり植樹活動の智恵を拝借している NPO 法人世界の砂漠を緑で包む会（事務局は金沢市）の中国における活動の根拠地である内蒙古自治区阿拉善盟にも毎年訪問しており、砂漠地帯における植樹活動を勉強させてもらっている。現地は騰格里（テンゲル）砂漠の一角にあり、苗づくりから始めて、苗を植えてきた現地はすでに森とも言えるまでに成長し、野生の鳥や動物が住み着いている。また社会活動にも力を入れており、宿泊施設を整備し小学生に植樹体験もさせている。こうした成果を目の当たりにして、我々の活動の参考にするとともに、地道な活動の成果を実感させてくれる。当地で我々が記念植樹をした苗が毎年成長し、背丈を超えてゆくのを見られるのもおおきな励みになっている。

我々はこれまでのところそれぞれの地区で３年間ずつの活動であり、いわゆる森を実感できる状況には至ってないが、何時の日かそうなり、生態系の改善につながることを念じながら、植樹活動に取り組んでおり、今後も地道な活動が、日の目をみることを確信して地道な歩みを続けたいと考えている。

中衛市の現地

内蒙古自治区阿拉善盟にて